

# 発達特性から生じる子どもの困りへの支援方法を探る

岡崎達也 (公社)京都市児童館学童連盟事務局主任厚生員統合育成担当

保育場面で気になる子どもの中には、発達特性を持つ子どもが少なくありません。特性は、①社会性、②コミュニケーション、③想像力、④注意・集中、⑤感覚特性、⑥運動面・学習面に分類され、それによって内在的な問題(自分が困る)、外在的な問題(周りが困る)、学業の問題のリスクが高まります。また、困った場面での表現方法にはアクセル(多動、逸脱行動など)とブレーキ(過緊張、フリーズなど)があり、園と家庭や学校と学童保育では姿が全く違うこともあります。支援者が連携を取り合い、場面場面での姿の意味を考えることが支援への手がかりとなります。

まず、発達特性はその子がずっと持っている特徴・個性であり、脳の情報処理の仕方が他の人とは違うのだということを理解してください。そして、特性があっても、環境や周囲の人の関わりがその子に合っていれば、気になる行動は起こりません。しかし、保育場面では、沢山の人や物や場面があって、子どもの困りが生じやすくなります。ここでキーワードとなるのが、構造化です。情報を整理して、発達段階や特性に合ったわかりやすい環境を作ります。使わない物にカバーをかけてオン・オフをはっきりさせたり、広さがあれば遊びのコーナーを作ったりします。また、スケジュールやカレンダー、時計、タイマー、写真、イラストなどを使った情報掲示の支援は、周りの子どもにも理解しやすいようです。わかりやすい保育空間の構築は支援の大きな要素となります。そして、物理的な手掛かりと同時に、モデルを示す人の存在が必要です。遊びのモデルとなる存在(保育者や年齢の高い子ども)や一人一人がじっくり遊べる環境が、それぞれの園の遊びの文化を創り、過ごしやすい環境の土台となります。

遊びは、楽しいか楽しくないか、認知発達・特性に合っているか合っていないか、という2つの軸で考えることができます。楽しくて認知発達・特性に合っている遊びが、その子にとって最適な遊びと言えるでしょう。自分で遊びを見つけ一定時間楽しめることが、その後(小学校へ行ってからも)の子どもを支えます。遊べない子どもは、児童館でも最も気になる存在です。こだわりと言われるものも、子どもが興味関心を持ち、強みとなり得るツールだと捉え、上手く使っていくことができます。子どもは、楽しい遊びの中でルーティン(いくつかの活動や日常習慣の決まった流れ)やスクリプト(生活や遊びの場面での流れや知識)を獲得し見通しが持てるようになり、生活に必要なコミュニケーションや言葉の力を高め、社会的なルール・マナー・スキルを学ぶ土台ができるのです。例えば、アナログゲーム(カードやボードゲーム)は、コミュニケーションや社会的スキル(ルールや順番の理解、駆け引き等)、感情の制御などを促進します。

また、子どもの困り感が表れやすい場面として「集まり」の場面があります。子どもが困った結果として、気になる行動が表れる、と考える対応を工夫しましょう。具体的には、しっかりと姿勢が維持できるような椅子の工夫や興味を持てるような保育者の話し方の工夫(視覚情報掲示や反応を促す場面設置)などが考えられます。

その子の良いところを見つけること、そして、特性を持つ子どもにとっても遊びが大きな力となることを踏まえて、今後の皆さんの保育を考えていただきたいと思います。